

D-13 外国人のみた近世の日本人の家庭教育観
京都女大家政 藤江真子

目的 日本の家庭教育観を国民性に照して、各方面から歴史的にとらえ、内外の比較研究によって現代日本人の家庭教育の根幹を発見したい。

方法 現代の日本人の倫理・家思想に大きな影響を与えた近世に着目し、当時の各種文献による調査研究してきた。その中で「鎖国日本に渡来した外国人は日本の家庭教育についてどう感じたのか」を彼らの本国への書簡・報告書・紀行文を中心にその内容を調べ、特に子供・教育・育児・躰・家庭・親子関係などの諸問題について、さまざまな角度より比較研究を試みた。

結果 著者の多くは商人・外交官・医者で教育の専門家ではないが、本国への報告文献の中で日本人の生活を各方面から観察し、批評でなく自国民との比較において、その特徴を述べている。多くの文献に共通していえるものの一例をあげると、(1)日本人の親子の情愛に感心し、『子の孝』をとりあげている。(2)日本の子供の行儀・躰のよさをあげ、しかも親は子に体罰を加えて、行為を強制しない事をあげ、他方子に対する親の甘さを指摘している。(3)親は子供を勇氣と節操ある子に育てようと、幼い時から熱心に教育している、などである。その他、家庭内での地位・出産前後の妊婦の生活・女子教育・子もり・寝物語に子を教育する親など細かい観察をしている。これらの中には誇張もあるだろう。しかし、指摘された事柄は現代人の思想・国民性の中に内在しているものも多い。本研究を通じて、現代人の家庭教育観は表面的変化に較べ、内面的にはまだまだ脱皮していないものが多い事を判然とした。